

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第六部

第三十六章

She confess the truth

— 真実を告白する —

峯村 明

目次

She confess the truth	
お願い	2
登場人物	3
Auld Lang Syne	5
She confess the truth	8
あとがき	15
奥付	16

She confess the truth

お願い

ダウンロードありがとうございます！

さて、ただ今『リ・コンストラクション』をリライト中なわけですが、

第二十三章・初版(2025年7/31発行)～最終章・初版(2026年2/15発行)をお持ちの方は、そちらを処分していただき、とにかく、無視してください！

リライト版は初版とはかなり違う展開になっていますので。
(2026年7/25以降発行が新しい版です)

26年09月26日 記

登場人物

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
サーディク	H&L財団・芸術部門の責任者 ポルタアウレアの皇太子エドミール
X & Y	サーディクのボディーガード
竜門渕ユミコ	サーディクのアシスタントを務める

cast36.JPG

Auld Lang Syne

342.

本部建物内にある劇場は研修目的で造られたものだったが、有効に使われているとは言いがたかった。舞台設備は言うまでもなく、防音設備、音響設備、照明設備、いずれも申し分ないレベル。お手頃な広さ。サーディク自身、研修用にはもったいないと思っていた。自分用に欲しいと、こっそり思ってさえいた。そこでワークショップ最終日にこぢんまりとバンド演奏を目論んでいたわけだが、……目論見は思いがけない方向へ展開してしまった。彼のボディガード予備軍が、マスターと連絡が取れないのをこれ幸いとばかりに、得物^{楽器}を抱えて乗り込んできた、と知ったのは前々日の朝。

マスターの安否はともかく彼らはもう、やる気まんまんだった。開放するなり、発散させてやらないことにはどんな惨事^{しゅったい}が出来るか——彼らは野獣か？——わからない状態だったのだ。

さいわい、学生たちには内緒だったが時間は確保してあった。ワークショップ終了から解散パーティまでのほぼ二時間。ここへ“ぶっこむ”のだ。

本日終業後に臨時のコンサートを開催する、と事前にアナウンスがされていたので、仕事を終えた職員たちは劇場に集まって来た。サーディクのネームバリューもあったが、金管楽器主体のバンドとやらがなにをしてくれるのか興味を誘っていた。

ほぼぶっつけ本番だったが、来場者が席について落ち着くまで、軽いナンバーをBGMのように流し、足慣らし。そして開演。本番。

劇場に残っていた最前までの緊張と昇華の気分が、ものの見事に吹き飛んだ。音は物質的熱風となって劇場内を、ドラムスのリズムは心身を揺さぶった。

もちろんというかなんというか、サーディク直伝の彼らである。歌って踊って芝居もできてしまう。そういうのが十何人もいる。そういうのが所々で歌い踊り、寸劇で笑わせる。肝心の演奏もロックありジャズあり映画音楽ありとバラエティ豊か。なおかつ全体が破綻することなく、まとまっている。そして観衆を飽きさせない。

“コンサートマスター” Zのセンスに、さすがのサーディクもうなる始末。かつては猛練習でさんざん泣かせてきた予備軍がここまでやってくれるとはと、感無量感に浸るほどの出来であった。

最後にキレのいいジャズナンバーでアンコールに応じ、軽快に締める。

観衆は身も心も燃え尽きたという満足感のうちに、拍手喝采を贈った。

問題はここからだった。

ほとんど出番のなかったサーディクがブラックスーツで再び登場。バイオリンを携えているのを見て聴衆は静まり返る。

舞台の反対側からもうひとり。月光のもとのさざ波のような水色の衣装をまとった黒い髪の麗人。

荒海と時とがふたりを隔ててしまった

友よ

さまよう日々も失意の日々も

君を忘れたことはない

夕暮れのひなぎくを忘れたことはない

時は去り 時は来る

幸い君にあれ

《Auld Lang Syne》

それは黄金門のバイスロイの想いであり、故郷を追われたメルノの想いだった。

メルノの生家ボムソワールを弾圧し、メッサナ市を混乱に陥れたとして、理不尽にもその責を問われたメッサナ総督家の面々、総督家の守護獣だったバラムとバランケ、また、アルチニアら化学者たち。

メッサナ・ブルーの家々と南国の太陽と風を、若者たちの喧騒を、隣人の優しさを愛した人たち。

ただそこで暮らしを営んだ名もない人たち。

メッサナを失って時空を放浪したすべての人々の想いだった。

ここブリュッセルは、そういった人々の再会の地、合流地点だった。小さな劇場は想いに溢れ、揺れた。

時は去り 時は来る

幸い君にあれ

She confess the truth

343.

解散式とパーティが済んだら（——何時になってもいいから今日中に——）オフィスまで来てくれ、と“総裁”からの伝言。

（“総裁”オフィスまで来い?? 今日中に?? なんなんだ。まずいことでもあったのか??）

仕事をやり終え、解散式も無事終わった。なにより——ユミコの仕事はサーディクの期待以上だった。彼女はサーディクの成さんとするところを正確に把握していた。魂のレベルでの理解は恐ろしい。言葉にしなくても誤解の余地がない理解度なのである。自分がもう一人いるようなものだ。声楽は完全にユミコに任せ、サーディクは舞踊と演劇に集中することができた。一日分のスケジュールが飛んだ弊害はなにも起こらず、学生たちも何も感じなかった。それどころか中途から加わったユミコ先生は学生たちにすっかりなつかれてしまっていた。

気持ちよく達成感に浸っていたところだった。学生たちのパーティでアルコールは無しだったから、これからボディーガードたちに混ぜてもらおうという矢先。XとYもなんとなく無然としているのは同じ気持ちなのだろう。しかし、ユミコさんも呼ばれているとわかると、主従そろって態度も表情も変わるのだった。現金な主従であった。

ワークショップ自体は時間をかけて練った育成計画の一部であったので、プレゼンテーション（発表会）そのものよりむしろ、今後の学生たちの成長の方に重点が置かれていた。

総括なり検証なりを行うには時間が必要で、今回のスケジュールには入っていない。

芸術部門のワークショップ最終日のプレゼンテーションに合わせて、ラウレンス代表も帰国しており、松山総裁と並んで劇場の特等席で鑑賞した。

彼らふたりがそろうというので、サーディクは、どちらでも構わないから最終日にステージで挨拶してくれと頼んだ。

代表と総裁は顔を見合わせ、「貴方と同じ舞台に立てと？ 勘弁してください」「おたくと同じ舞台に立て？ 勘弁してくれ」

代表：「私にそんな度胸はありません」

総裁：「オレが舞台に立ったらおたくの存在価値がかすむ」

サーディク：「……………」

彼らは互いになんでも言いあえる仲であり、常に和やかな関係であった。

“総裁”はオフィスで待ち構えていた。が、Tシャツ姿の彼を見て、（仕事の話じゃないのか）と呼ばれた全員が思った。彼はまず、全員を労ったのだが、デスクに積まれた紙の束を見て、困惑したのはユミコである。「やはりご迷惑だったのでしょうか」この紙の束が松山健を悩ませているのは確かだった。

「いえ。そういうことでは、ないんです」健はユミコに向かって頭をふり、エドミールには、「とにかく、黙って話を聞いてほしい。できる限り短時間で済ませるから」、そう言ってデスク上に広げた紙の中から一枚をとって差し出した。

目にしたとたん。エドミールは顔をしかめる。彼が見たこともない様式のペーパーだった。無数のマス目の中にひとつひとつきっちり納まったエキゾチックな文字。日本語用の原稿用紙だ、と健は言った。

十年ばかり前に西ノ宮奈々子という少女が亡くなった。十五歳の誕生日を目前にした高校生だった。彼女は学校のクラブで小説を書いていた。このペーパーの束は学校の部室に残されていたもので、奈々子が亡くなったという知らせに、クラブのリーダーが奈々子の自宅に届け、母親である優美子が受け取った。

遺品となった原稿は、学校名の入ったまち付き封筒に入れられ、しっかりと封がされていた。クラブのメンバーもリーダーも何かが書かれていたのか知らないといい、優美子も開けてみるのも無粋だろうと考え、娘の棺の中に入れた。

『奈々子に持たせてはいけない』、そう言って棺から取り出したのは祖母のめるのでした。『奈々子に縁のある人に渡しなさい』、と。祖母は、その、色々不思議な力をもっていましたから、私はそういうものかと思い、祖母の言う通りにしようと」

「結局、ケンが持っているのか？」

「ええ、以前、一度断られたんです。でも、私、どうしても桧山さん以外の人が思い浮かばなくて、今回、こうしてブリュッセルまで持ってきたのです」

「西ノ宮さん、いや、竜門渕さんも中を見てないんですね」

「はい。奈々子が亡くなった日に、文芸部の部長さんが封をした、そのときのままです」

「原稿は奈々子さんの直筆？」

優美子はエドミールから原稿を回してもらい、ええ、とうなずいた。目が潤んでいる。
「奈々子の字です——」

344.

健は感情のない声で言った。「まだ全部読んでないのですが……」

優美子は健の言葉を待つ。

「主人公は十八歳の少女。ソフィアという名で、ヨーロッパのある国の王女。パリへ音楽の勉強に来て、外国人の青年と出会います——」

「ソフィアには、くくにローティーンの甥がいる。甥の名は、エディ」

エドミールはソファからそろそろと立ち上がり、いきなり健のデスクに詰め寄った。そして激しい口調で言った。「おい！ 見せてくれ！ その原稿！！」

健はゆっくりとエドミールを見上げる。「いいけど。日本語、読めるのか？」

「読めん！　だがその外国人の男の名前を当ててやろうか！」

優美子はエドミールの態度に驚き、不可解に思いながら、ふと手にした原稿に目を落とした。それは主人公ソフィアがセーヌ川のほとりで見知らぬ青年と出会う場面だった。青年は名乗った。その名は――

「コウイチだ！　　そうだろ！」

優美子はそっとソファを立ち上がり、原稿を健のデスクに返しながらか言った。「その通りです」

345

エドミールはユミコの声で我に返ったようだった。それで、健にではなく、ユミコに言った。「失礼。あんまり、驚いたもので」

健は席を立て、キッチンに行き、自分でコーヒーマーカーをセットしようとした。今夜はパウジーニはいない。Xがあとを追ってきて（やりましょう）、と。（うん？　じゃあ、きみらの分も）

戻ってきた健はデスクではなく、革張りのソファのひとつに腰を下ろした。「途中まで読んで、オレも驚いた。びっくり仰天というか魂消たというか、頭の中がまっしろになった。エドミールに確かめなければ、ブリュッセルにいるうちに、つかまえておかなければと」

ああとエドミールは呻くように言った。「黙って話を聞けといったな、すまない、つい.....」

「無理もないさ。それで.....おたくから竜門渕さんに説明する、というのはどうだろう」

「.....そうだな、ユミコさん、聞いてください。私にはソフィアという名の叔母がいた。私の父の妹に当たります。彼女がパリの学校へ留学した、十八の年、私は十二、三のローティーンで、彼女はわたしのことをエディと呼んでいた。ソフィアはパリで外国人旅行者コウイチと出会って.....そして.....まだ全部読んでないんだっけ？」

話をふられて健はうなずく。

「ソフィアとコウイチがパリで出会って、それからのことは、誰も知らないのです。私も、

ケンも」

優美子の視線を受けて健は吐露する。「ソフィアはオレの母、コウイチは父です」

優美子は絶句した。娘は、奈々子はいったい何を書き残したのか。

346

「オレは物心つく前に両親と死に別れました。両親のことを何も知らないし、今さら知らなくていい、という気持ちはある。だがエドミールにとってソフィアは、多感な年代に慕い、かわいがってもらった身内、彼女になにがあったか知りたい、そうだろう？」エドミールは目をあげずに小さくうなずく。

「だから、竜門渚さん、この原稿を英訳してもらえませんか」

エドミールとユミコは、えっ、と健を見た。

「わたくしが——？」

「財団の中に日本語を別の言語に訳せる者がいなくはないんですが、もしかしたら、すごく……プライベートな物語かもしれない。もし、そうだった場合……フィクションだとしても……」

「たしかに……知らない人間の目にふれることには、抵抗はある、な」

「竜門渚さんになら、お任せしていいというのが、オレの判断です。エドミール、おたくにも異存はあるまい？」

優美子が引き受けてくれるのと、作業時間とを見越して、健は既に彼女用にパソコンを手配していた。パウジーニは別室でそのセットアップにとりかかっていた。

エドミールはあくる日、ブリュッセルを発ち、くにへ帰る予定だった。優美子は娘の

原稿のコピーとパソコンとを抱えて同行することになった。なにより、そう望んだのはエドミールである。

347

「さいごに、もうひとつ。ほんとにこれでさいごだから」

健はエドミールをなだめるように言い、デスクの引き出しからなにか取り出して差し出す。小さな封筒だった。

「今日、イリチャの見舞いに来た人が、イリチャに預けてったそうさ。おたくに渡してくれ、と」

「——私に？」

「そう、“バイスロイ”に」

エドミールは宛名も差出人もない封筒をまじまじと見、それからおもむろに受け取って中を改める。折り畳まれた紙片が一枚。短い文面。

『黄金門の血に感謝する。ありがとう』署名は——“R”

「医療チームのコンテナにはイリチャのほかに、もうひとり、重傷患者がいたんだ。重い火傷を負っていた」

「その人に——私の血を？」

「そういうことだな、驚くような回復ぶりだったそうさ、自分で歩いてイリチャの見舞いに来て、長いこと話し込んでいたそうだから」

「イリチャはその人を知ってた——？」

「ああ」

「誰だろう」

「オレはやつの交友関係はさっぱりだ。ミクトラン時代のことくらいしか知らんし。おた

くの方がくわしいんじゃないのか？」

「R？ R？ まさか.....会えるだろうか.....この人に」紙片をもつ指先が震え、声が震えている。

「医療チームにはオレが連絡するから。すぐに行けよ」

ボディーガードのひとりは一階に、ひとはユミコを部屋まで送るために同行する。誰もいなくなったオフィスで、健は原稿の続きを読み進める。

あとがき

エドミール殿下が自分（の代役が務まるレベル）の影武者を育てた結果（第4部第23章 In Brussels の№244 参照）、予備軍がフルバンドが組めるような実力をつけてしまいました。なお、常時殿下を護衛しているXとYは厳正な審査（オーディション）の結果選ばれたのでした。

フルバンド（＝ビッグバンド）について

『実力の揃った大勢のプレイヤーを要するビッグバンドは、デジタルミュージック主流の現代にはコスト的にも割に合わない、過去のもものとされている。が、そのゴージャスなサウンドは他の演奏スタイルでは表現できない得も言われぬ魅力がある』

<https://reminder.top/174154323/>

上記の記事は『Tokyo Ensemble Lab』というグループについて書かれたもので、うちの作中でのイメージは、アルバム『Breath from the Season』から、オープニングに『Lady Ocean』、続いて『Junky Express』、てな感じです。よかったら聴いてみてください。“彼ら”が演奏してる、と妄想しつつ。

電子書籍に YouTube や音楽ファイルを貼ることはできますが、まあ、著作権がありますから。

2026 年 9 月 26 日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十六章 She confess the truth

2026 年 9 月 28 日 初版発行

著者 峯村 明 E-mail dbailai388@gmail.com

表紙素材 「イラスト AC」 「NEO HIMEISM」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

℥ Akira Minemura 2025-2026

著 者 峯村 明
イラスト イラストAC
撮 影 NEO HIMEISM

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社